

東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査*1

竹内 照文・芳養 晴雄
小久保友義・今原 幸光*2

目 的

東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き、ならびにシャットネラのシスト分布密度および栄養細胞の発生、増殖について全体像を立体的に把握し、予察技術の確立に資する。

なお、解析結果について水産庁より発行される予定である。

方 法

調査は、播磨灘、大阪湾と紀伊水道で5月24日から8月31日まで合計23回、①水温、塩分の測定(73定点)、②溶存酸素濃度の測定(14定点)、③シャットネラ栄養細胞の計数(73定点)、④シャットネラシストの計数(73定点:5月24日)、⑤栄養塩濃度の測定(14定点)、⑥シャットネラ以外のプランクトンの計数(14定点)について一斉調査を行った。

調査機関は、香川、徳島、岡山、兵庫、大阪と当県の6府県と8民間機関であり、各々の水域と調査日を分担した。

なお、当県は日本NUS(KK)とともに紀伊水道北東部の7定点を分担し、項目の①~④について調査を行った。

結 果

調査水域では、シャットネラの増殖することがなく、赤潮の非発生年であった。紀伊水道北東部については以下のことが要約される。

- 1 シャットネラの栄養細胞は8月末に1 cells/ml 出現しただけで、その他は全く検出されなかった。
- 2 シャットネラシストは10 cells/cm³以下(MPN法)の密度で分布していた。
- 3 夏季の天候は不順で、気温と降水量は平年値よりも低目であった。梅雨期(6月8日~7月8日)の雨量243mmで平年に比べて少なかったが、7月中旬頃からもどり梅雨の状態になり、150mm程度の降雨があった。
- 4 表面水温は6月上旬に20℃、7月下旬に25℃を越えたが、水温の上昇はにぶく、平年より若干低目に推移していた。また、塩分も、表面水では31.00、32.00のオーダーで推移することが多く、低目であった。

*1 東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査費による。

*2 水産課